

今年度の活動調査と次年度調査に向けて

内田 康介

I IKEA ワークショップ参加記録

2021年7月20日

9:45 受付

10:00 IKEA 長久手ストアマネージャー：ピーターさんからのお話

⇒IKEA のサステナビリティ戦略についての紹介

⇒フードロス問題について

⇒ワークショップ参加 IKEA スタッフの紹介

- ☞ローカルマーケティング部
- ☞サービスオフィス
- ☞マーケットホール
- ☞フード部門

⇒参加企業の紹介

- ☞フードバンク愛知
- ☞イオンスタイル長久手
- ☞イオンモール長久手
- ☞中部電力
- ☞日東工業



10:15 IKEA の Food Waste などに関する説明

⇒IKEA では People and Planet positive という取り組みをしている。人々の生活を中心によりポジティブにしようという試みである。

・IKEA の People and Planet positive の具体的な試み

⇒健康的でサステナブルな暮らし

☞プラントベースフード：IKEA ではソイミートボールを販売

☞商品展開：竹を用いた商品が拡大

⇒circular and climate positive

☞circular hub

☞スペアパーツを大量に付属：購入した商品が壊れても客が自ら直して使い続ける

☞ 原材料の追跡：どこから輸入したのかを明確化

☞ 再生可能エネルギー：2026年までに、IKEAの配送車を全てEV車に換える予定

⇒ 公平性とインクルージョン

☞ 様々な人への就労支援：日本ではシングルマザーの雇用を拡大

☞ 子ども募金

☞ 原材料の生産環境の追跡：エシカルな調達

・ IKEAの People and Planet positive

⇒ Respect food・Respect each other・Protect the future・Save the future

・ IKEAの Food Waste Action

⇒ 見た目や数字で問題を意識しやすくする

⇒ コワーカー（労働者）が参加しやすい

⇒ 努力効果が目に見えやすい

☞ Waste Watcher：食材廃棄物の廃棄理由や量をデータとして残す

・ 廃棄する品目を選択→理由を選択→量りおいたゴミを廃棄

・ Togetherness（連帯感） Cost Conscious（コスト意識） People & Planet Positive を考える

⇒ Waste Watcherを導入してから IKEA長久手では40～70%の排気が削減された

⇒ コワーカーレストラン（社食）のフードロスに着目し、閉店時のフードロスを平均50%減少させた

10：40 フードバンク愛知 かじさんからの説明

⇒ フードロスを生かす役割

⇒ 「もったいない」と困っている人をマッチングするような感覚

⇒ 運送会社の中の社会貢献事業部門だからフードの運送・倉庫保管に強みがある

⇒ フードを各企業・会社で集めてフードバンクへ集結させるなどもしている

10：50 中部電力 武藤さんの話

⇒ 中部電力は食品ロスの中でも生産者側の視点から改善点を考える

⇒ 食品ロスは規格外品・返品・売れ残り・過剰除去・直接廃棄で起こる

⇒ 植物工場を作り、農業の代替手段として活動をする（3社共同事業）

☞ 4定（定量・定価格・定品質・定時）を安定させられる

☞ 土を不使用なので、菌が少なく、日持ちもしやすい

☞ レタスを栽培し、根以外の部分は全て食べられる→除去部分が少ない

☞ 1日に10tの生産ができるようになる（将来的には）

11：20 チーム作りと話し合い

⇒ 誕生日順に並び、そこから4人1組でチームを作る

⇒ チームごとに「私たちの理想の街」についてのテーマで話し合いをする

⇒ 初めに「家庭・買い物・外食・その他」の4項目で食品ロスの原因を挙げる

⇒ その原因をもとに「私たちの理想の街」について考える

12：00 ランチ

⇒ IKEAのサステナブルフードランチ

13:00 チームの話し合いの続き

⇒チームごとに「私たちの理想の街」について発表をするための準備

14:10 各チームの発表

⇒各班5分程度

14:40 総括・解散

⇒IKEAからお礼の言葉など



〈感想〉

今回のワークショップではIKEAがサステナビリティ戦略を行い、何に着眼し、どのような活動をしているのかを知ることができた。IKEAではお店で働くすべてのコワーカーに理解され、実践してもらえよう企業努力がなされていた。また、コワーカー自身が参加しやすく、その参加結果が数字としてわかりやすくされていることで、その行動の結果が目に見えてわかるのでそれぞれの参加意欲につながるとわかった。

中部電力からの話では3年後の工場設立に向けての活動努力や現状を知ることができて面白かった。フードロス問題に対して、様々な角度から問題を考えることが必要だと気付かされたし、その中でも生産者側の視点として生産活動の変化を起こしたことはすごいと思う。

ワークショップのチーム発表では「私たちの理想の街」ということで各チームの思い描く理想の街について考えた。私はたちのチームには日東工業の方とフードバンク愛知のカワジさん、そして4年生の竹中くんがいた。フードロスに関することに着眼して、フードロスがどうすればなくなるかを考えた。子ども食堂を中心にし、地域コミュニティが活性化するような方法、そして、子ども食堂がもっと色んな人に使ってもらえよう方法を探った。すべての人に利用してもらえよう各小学校区に1つは子ども食堂があること、そして地産地消をすること、食器は竹が原材料の食器を使うことなどを考えた。フードロスをなくすためにはお金という概念を無くした方がいいとか、物々交換にするなどのアイデアが出たが大きな壁があったので、その方向性はなくなってしまった。しかし、このお金を払えば自分のものだから捨てるでも大丈夫といった考えが結果として良くないのではないかということはチームの意見としては残っていた。この点はもっと考えたいことであった。

今回のワークショップをとおして、様々な企業の人と話をすることで、学生の自分にはない視点、考えに気付かされるが多かった。それぞれの企業がSDGsをはじめ、環境や社会問題に関心を持っていることを知ることができたし、実際多くの企業でその問題を改善するための行動がとられていることに驚いた。テレビで報道されているSDGsなどの取り組み

は自分とは遠く、どこかで行われているのかなといった漠然としたものであったが、短な企業やお店でも取り組まれているし、それが自分の買うもの、使うものにも大きく影響をしていることを知れたのは良い機会であった。IKEAは今後もこのようなワークショップを開催したいとおっしゃっていたので、機会があればぜひ参加したい。また、さまざまな企業やお店の活動に触れていけたらいいと思う。

考察

～なぜ企業はフードロス削減に取り組むのか～

今回のワークショップを通じて、私は企業がなぜフードロス削減に取り組むのかについて考える。もちろん、企業によってそれぞれ理由はあると思うが、今回のワークショップを通じて、大きく2つの理由を考えることができた。

まず1つ目は、企業という大きな枠組みの中で、自分自身が環境問題への取り組みへ参加していると感じやすく、その成果が見えやすいことである。会社内だけで取り組んでも、なかなか社会全体としてこの問題を改善することには直結しないし、社会問題として認識されているとは言い難い。しかし、会社内でも家庭内でもさまざまな場で環境問題への取り組みを実践できるという点でフードロス削減に注目が集まっているように感じた。また、日本では年間2,531万トンの食品廃棄物が生み出されている。その中でも、食品ロス、つまりまだ食べられるのに捨てられてしまう食品は600万トンである（消費者庁「食品ロスについて知る・学ぶ」より）。これは1人が毎日茶碗1杯分の食材を捨てていることとなる。ここで大切なのは、この食品ロス問題を自分に置き換えることができるという点である。自分の生活の中で捨てているものがないか、無駄にしているものがないかを容易に連想することができる。環境問題は個人にとって、漠然としやすいが、1人1人に置き換えることのできるこの数値は大きな意味を持っている。そして、それは人々の行動にも直結することである。食品を捨てないために、自分自身が取り組めることが多くあるというのも良い点である

では、IKEAを例にして考える。IKEAの食堂ではフードロス理由や分量を記録しなくてはならない。自分がどれだけの食材を捨てているのか「見える化」されているのだ。数字として自分が見ることで問題認識がなされる。それだけでなく、自分の食事からできるだけ無駄を出さないように食べたいもの、食べられるものだけを自分で盛り付けるようになっている。一律に配膳する方が、食事もしやすいし、手間もかからないが、自分たちの食事にフードロスが関係しているとは考えられなくなってしまう。そこで、自分で食事を選ぶことで、自分のとったものを、責任を持って食べるという意識づけを行うことができるようになる。日頃から廃棄に対して、食品に対して目を向けることで意識づけを促すことにつながる。

2つ目は、フードロス削減の取り組みがさまざまところへ繋がりを生み出す点である。今回のワークショップでは、参加企業の半数程度がまだ具体的なフードロス削減についての活動をしていなかった。それなのに、なぜ今回のワークショップに参加することにしたのか。それは、同じ地域内での輪を広げるためであった。なぜ輪を広げる必要があるのか。それは、地域によってフードロスに対しての改善手段が異なると考えているからである。極端なことを言えば、畑の多くある田舎と生産手段の少ない都会では食品に対する考え方、扱い方が異なっている。それなのに同じ改善策を取ることは間違っているということである。つまり、それぞれの地域にあった方法を模索するところから始めなくてはならないのだ。そのために、その地域にある企業同士で情報の共有をする必要がある。つまり、フードロス削減という目

標を介して地域での輪をつくり広げることができるのである。中部電力から紹介された植物工場の事業では、中部電力をはじめとする3社の共同事業を展開している。フードロス削減という目標へ協力をしている一例である。そして、企業と学生とを繋ぐきっかけにもなった。また、今回のようなワークショップを通じて、各企業の取り組みを知ることができるし、それぞれの知恵や知識を結びつける大きな場ともなる。環境問題や社会問題の改善という大きな目標に向けて進むために、繋がりを生み出すことができるため、企業も前向きなのではないか。

Ⅱ 子どもの居場所づくりへの参加報告

1年を通して私はさまざまなイベント、活動に参加した。まず、学習支援活動についてである。私が参加したときは、子どもは約7名ほどであり、コロナ禍ということもあって規模は小さめであるかなと感じた。講師をしているのは学生や定年退職したご高齢の方であった。参加している子どもの家庭事情はさまざまであり、両親が共働きで家にいる時間がとても少ない子ども、母子家庭で母親との時間が十分に取れていない子ども、金銭的に十分とはいえない家庭で育てている子どもがいた。家庭の事情はさまざまであり、全てを聞くことはできないし、それぞれの状況に100パーセント合わせることは難しいと思うが、事情を知っていることも大切であると感じた。

私が受け持ったのは小学5年生の女の子であった。算数のドリルの宿題があるからということで一緒にやることにした。分数の文章問題であったが、正直全く理解できていない状況であった。もちろん、小学5年生の子どもにとっては難しい問題ではあると思うが、それ以前に基礎知識や前提知識、今までの学習が追いついていないのかなと感じた。そもそも、分数の通分の仕方、分数の計算自体のやり方がわかっていなかったり、文章問題の答え方、回答の書き方が不十分であったりすることが多かった。「学校で習ったと思う」という漠然とした感じであり、学校の集団授業では、なかなか個人として指導してもらうということも少なく、授業に追いついて行けていなくても進んでしまっているというのが現状であった。自宅でも両親が宿題の面倒を見てくれるわけでもなく、学習塾に通ったり、公文や学研のような場に通うことのできない子どものフォローアップをどのようにするのかをもっと選択肢を増やす必要があるように感じた。

もちろん、今回のように学習支援の場でフォローアップ、サポートをすることが大切であると思うが、学習支援という場も簡単に開けるわけではない。学習支援をできるだけのスペースのある場所を確保し、子どもたちに教えられる人材を集め、さらに教材や道具などさまざまなお金がかかる。もちろん、そのほかにも色々な問題はあるだろう。今だと、コロナ禍の開催には、感染対策や万一、感染してしまった場合のガイドラインの策定など、個人だけでは抱え切れないほどの問題が多く存在するだろう。それらの条件を全てクリアし、ようやく学習支援としての環境を整えることができるだろう。

子どものニーズに合わせて学習支援をすることがベストであると思うが、決められた時間の中でどれだけのことを満たせるのか、とても難しい問題であると思う。自分自身も、この子は何時に帰るからと終わりの時間が決められた状態で一緒に勉強をしていたが、時間が最後は足らなくなってしまった。わからない問題が多く、そしていろいろなところでつまずいてしまう点は想定外であったと言える。週に1回の開催ではその子の学習をサポートしきれ

ているとはいえ、少し心残りに感じた。学習支援という場を開くことができているだけ、十分であるようにも感じたが、それ以上のサポートそして、継続的なサポートが必要であると思う。また、塾に行っている子ども同様の学力、知識にどうすれば追いつけるのかを考えることも必要であると思う。

そして、オリンピックに参加することができたというのも私にとっては良い経験であった。オリンピックの中でも子どもの居場所づくりという点を考えることができた。私たちは、技術役員（ナショナルテクニカルオフィシャル）という役割であったが、テニス種目には多くのボランティアスタッフが関わっていた。

会場内で選手を乗せて移動するカートの運転手、ゲートスタッフ、ボールパーソン（ボールボーイ、ボールキッズ）など多くの人が携わっていた。本来なら、もっと多くの人が参加していたのだろうが、無観客でも多くの人が携わっていると実感することができた。

その中でも、大会期間中、もっとも過労であったのは、ボールパーソンの人たちである。オリンピックという場に携われるという名誉な部分がある反面、勤務状況はかなり厳しいものであった。炎天下の中、コートを走り回り、ボールをコントロールする仕事は、体力を使うだけでなく、頭もかなり使う。初日から2日目までで15人いたサブも0になっていた。いわゆる熱中症でダウンする人が多くいた。今回のボールパーソンの多くは大学生で、関東圏の大学生が中心であった。慶應大学や駒沢大の学生も多くいて、部活やサークルでテニスにもともとつながりのある人が多かったようだ。1日目から3日目までは朝7時集合、その日のマッチが終わるのが9時や10時と拘束時間は12時間を超える。パラリンピックでは、15時から夜中の2時まで大会をやっていた日もあった。ボランティアであるボールパーソンは宿泊費も出ず、毎日自宅から通っている人が大半であった。夜中の2時まで参加できる人がいないため、自分の終電まで働くという形を取られていた。ボランティアということで、どれだけ過酷な労働条件でも日当はなく、交通費と食事、飲み物の支給のみであった。正直、給料も宿泊も移動手段も確保されていた自分からすると、なぜそこまでしてオリンピックで働きたいのだろうかという疑問が少しあった。

オンコートの時間を含め、少しずつではあるが話を聞くことができた。話を聞くとまず、テニスが好きでオリンピックという大きな行事に参加することができる喜びや達成感、そして自慢話となることがあった。テニスが好きだからこそできることあり、やりがい搾取ではないかと感じたところも正直あった。しかし、好きなものに携われるよろこびは自分にも十分に理解できる。

そして、もう1つは自分の人生の中で大きな経験となること、そして新たな人間関係を構築できるという点に重きを置いている人が多かった。オリンピックという舞台で働くことができた経験値は人生の中で大きなものであり、その経験は誰にもとってかえられないものである。それだけでなく、実際に大会を通して多くの人と関わることはできたのも良い経験であると思う。他大学の人と新たな繋がりを持つこともできるし、人材派遣の会社として大会に参加している人とも交流を持つことができる。日常では交わることのない人と話すことができ、その経験や知識は自分の人生にとって大きな力となると思う。非日常の影響力は大きなものであり、自分を含めた学生にとってはオリンピックという場所はそれぞれ居場所となっていたのだろう。学習支援や子ども食堂、フードパントリーとは別の形ではあるが、オリンピックも子どもの居場所となっているのだなと感じた。

今いるオーストラリアでも、多くの子どもがボールキッズや会場案内のボランティアとし

て活躍をしているが、それぞれが役割を持って活動をするのできる場があることが、居場所づくりにもなっているのだと感じた。

Ⅲ 次年度のゼミ活動の提案

秋学期の授業を踏まえて、来年度の活動についてやりたいことや目標を記す。

- ① 子ども食堂・フードパントリーへの積極的参加
- ② 実際に参加して、子ども食堂の問題点を考える
- ③ 問題点を踏まえ解決策を考える⇒実際に子ども食堂に提起する
- ④ 子ども食堂がどうすればコロナ禍でも活動することができるかを考える
- ⑤ 子ども食堂以外で、子どもの居場所をつくる

秋学期はフードパントリーや子どもの居場所（学習支援）などについて考えた。『貧困とはなにか』を読み、「貧困」についてより正しく知るとともに、世界各国の貧困のあり方、などについて考えた。

話は変わるが、私はフードパントリーは本来、子ども食堂を行っていた活動の変化型であると思う。コロナ禍で活動できない子ども食堂は一時停滞しており、今後変容させていく必要があると思う。そこで、コロナ禍でも活動をしている子ども食堂に自らが参加し、情報を得ることが必要であると思う。具体的には、コロナ禍でどのように子ども食堂を行っているのか、感染症対策や食材の調達、金銭的な面、人件費や人の流れなども知る必要があるだろう。感染症ガイドラインなどがあるならそれを知るのも必要である。

その情報をもとに、コロナ禍でも子ども食堂を開催している場での問題点、そして、子ども食堂を開催するためにはどのような問題を乗り越える必要があるのかを考える。また、行政として今日の子ども食堂に対して、どのような見解を示しているのかを知る必要もあるだろう。子ども食堂に参加して、自分たちが考えた問題点とその解決策を考える必要もある。その解決策を、実際に子ども食堂を運営している人に提案し、さらにそこから再度、問題点と解決策を考えることが重要であるだろう。また、それぞれの子ども食堂を参考にし、感染症に対するガイドラインを考え、立案したり、それを今開催できてない子ども食堂の再開のきっかけにできるレベルまでできたらいいと思う。

1～4を繰り返し、考察を続けることで現在の社会の中での子ども食堂の立場、問題点、そして解決策を考えることができるだろう。

2年次では、子ども食堂を開催している場は少なく、なかなか参加することができなかった。その中でも、学習支援に参加して、貧困家庭とまではいかないが裕福とは言えない家庭で育つ、子どもの学習の状況、問題が垣間見えた。また、IKEAのワークショップに参加し、企業のフードロスに対する努力、サステナブルな社会についての将来性が見られた。どういった企業が子ども食堂やフードパントリーに力を貸してくれるのか。また、なぜその取り組みを始めたのか、今後どうすることを考えているのかなどを調査することによって、今参加していない企業への斡旋につなげることができるかもしれない。今後、参加してくれそうな企業を調べ、実際に直接話を聞くこともおもしろいと思う。企業とのマッチングをすることができたら大きな効果も感じられるだろう。そのために、さまざまな調査を行う必要もある。

そして、前回のレポートにも記したが、子ども食堂や学習支援、フードパントリーの場だ

けではなく、さまざまな場所で子どもの居場所を生み出すことができると思う。その一つがボランティアに自らが参加することである。ボランティアは自分のことに余裕がある人が参加するイメージを持たれるが、そうではない。自分の身と時間さえあれば、参加できるものもある。参加するイベントや活動を選ぶ必要はあるが、参加する意義はかなり大きいと思う。

オリンピックのように交通費や食事が保証されている場合は、自分自身がマイナスになることはない。もちろん拘束されている時間や労力などを考慮すると人によってはマイナスであると捉える人もいると思う。しかし、その活動を通して、人との新たな出会いに繋がったり、今まで知らなかった世界を体験したりすることができる。その経験やスキルアップ、社会経験は自分の人生に大きな良い効用をもたらすだろう。新たなコミュニティを作ることで自分自身に大きな利益が発生するかもしれないし、今後の人生に大きな変化をもたらすかもしれない。さまざまな可能性を秘めている場なのである。それは子どもにとっても大きな居場所になるだろう。

そういった場があることを知ってもらい、実際に参加してもらえるような方法を考えることも必要であるだろう。どうすれば、ボランティアに参加してもらえるか、どうすればボランティアに興味を持ってもらえるか、どうすればボランティアに参加することができるかを考えることが必要である。自分たちと一緒に参加することもいいだろう。

以上の5点を次年度のゼミ活動の提案とする。5つの中で重複しているものもあるが、子ども食堂に積極的に参加し、その活動を広げられるような行動をする。また、コロナと共生して子ども食堂が行える方法（ガイドライン）を模索する。今の子ども食堂の問題点から解決への糸口を見つける。さらに、新たな子どもの居場所を見つけること、作り出すことをしていきたい。